

清水美里(シミズ ミサト)
平成19年度3次隊 音楽 ホンジュラス

プロフィール

出身:高島市 年齢:25歳 派遣先:サンタロサデコパン市文化会館

吹奏楽の魅力を伝えたい、音楽が国境を越えて人と人の心をつなぐ架け橋となることを体感したいと思い、応募を決意しました。ホンジュラスのゆったり流れる時間の中でフレンチホルンを吹くひとときが大好きです。

ホンジュラスの気候や文化の紹介

中米に位置するホンジュラスは日本の3分の1ほどの大きさであるが、北にコーラルブルーのカリブ海をたたえ、緑の山々がまぶしい自然の豊かな国である。私の住む街は西部の山岳地帯にあり、年中通して春のような温暖気候である。石畳の道、昔のレンガ造りの建物が残る古風な街並で、馬やロバ、牛が薪を背負って歩いている光景をよく見かける。メキシコ風の大きな麦わら帽子をかぶったおじさんたちが街角で葉巻をくゆらす姿、頭の上に大きな籠を乗せてマンゴーやパパイアを売る女性などは、一昔前の時代を感じさせる。挨拶交わせばもう「アミーゴ(友達)」。ラテンのビートのようなサクッとしたノリが心地よい。

活動や生活について

まずは、ホンジュラスのお国柄。

ラジオ局のお兄さん。放送中でも携帯電話に出る。

ピアスを忘れた女の子。「大変大変！」授業が始まるのに、家まで取りに帰る。

裸足でお金をせがむおばあさん、何故か携帯電話を持っている。

バスのガラス枠に挟まった紙切れ。ゴミだと思って取り除いたら、ガラスがはずれた。

きめ細かい粉砂糖のかかったライ麦パン。白カビだった。

街角の警察がナンパするのは日常風景。

雨が降るとインターネットの回線速度が遅くなる。

レストラン。オーダーを聞いてから買い物に。

どこか抜けているが許容範囲である。「何かあっても何とかなる国」私の持つホンジュラスの印象である。

私の配属の文化会館はホンジュラスでも珍しく吹奏楽器を20台ほど有しており、これらを活用した音楽クラスの実施が求められている。私は、9歳から15歳くらいまでの子どもたちを対象にトランペット、ホルンなどの金管楽器を教えており、吹奏楽器に興味を持つ子どもたちが集まってくる。ホンジュラスの学校の中で音楽教育の位置づけは低く、音楽専門講師がおらず、授業すら存在しない学校が多くある。カリキュラム化されていないため、楽譜は一般にはほぼ普及していない。しかし、ラテン文化に音楽は必須。バスの中、レストラン、夜通しでいつも音楽が溢れている。爆音であっても「音楽だから…」と誰も文句は言わない。音楽が、掃除や洗濯、食事と同じく生活の一部であり、日本よりも暮らしに密着しているように感じる。

私が主に力を入れている活動は、吹奏楽バンドの結成である。日本では多くの学校が部活動として吹奏楽バンドを抱えており広く普及しているが、ホンジュラスでは、そうではない。楽器そのものが手に入りやすく、文化会館にある数台の楽器も、もはや使える状態ではないようなポンコツ楽器である。そのような状況の中で、

ひとりひとり違う楽器で違う楽譜を吹いて合わせると、ひとつの音楽になるという、この吹奏楽の楽しさを共感したいと思い、日々活動に徹している。「練習すれば、何か素敵なことが待っている」と、子どもたちは、好奇心いっぱい、プレゼントの箱を開ける時のようなわくわくした気持ちで、楽器を吹く。中でも、初めて和音を重ねた時に「わあ、すごい！」と歓声をあげた、子どもたちのくりくりした目の輝きが忘れられない。私が吹奏楽に没頭した頃、まるで恋人のように一日中音楽を頭に巡らせ、楽器に貪りつき、まるで磁石にひきつけられているかのように音楽室に走った日々、一途に音楽に恋した初々しい気持ちをここホンジュラスで思い出し、逆に子どもたちから音楽への好奇心を思い出せと諭されているような気がする。また、休憩時には、彼らとかくれんぼをしたり、木登りをしたり、階段の手すりを滑り降りたり、まるで子どもの時に還ったような心境に陥る。

しかし、発展途上国という現実生活の中でひしひしと実感する。日々の活動で触れ合う子どもたちは市街地に住んで、学校にも通っており、経済的には安定している方だといえるが、少し街外れに目を向ければ、貧困層が広がる。土だらけの顔で、下は裸足、お金をせがむ笑顔を失った子どもたちがたくさんいる。私の家は雨漏りが日常茶飯事であるし、週に2回の水の配給がストップしてしまう時もある。冷え込む夜に水シャワーは体にこたえるので、浴びる前に走って体を温める。買った靴は数日で底が剥がれ、服は左右微妙に丈が違う。というように、日本の生活と比べれば不便な点はたくさんある。

私の同僚の家は、決して裕福とは言えない。新しい家を建設中であるが、月の収入があり次第、レンガを購入し少しずつ積んでいくといった感じである。トイレは蠟燭の灯りひとつで薄暗い。裸電球ひとつ灯った居間で、持ち寄ったワインを片手に、同僚の歌とお父さんのアコーディオン、中南米独自の弦楽器たち。「これ、子どもの頃好きだった」などと言いながら、ソファーにもたれ口ずさむ。決して物質的には満たされていないのに、この空間に溢れる温かい空気は、一体何だろう。まるで絵に描いたような家族の団欒を目の当たりにして、日本の家族との遠い思い出をひたすら反芻し、ああ、もしかしたらこれが「幸せ」と呼ばれる時間なのかもしれないと感じた。また、この街は停電がしょっちゅうである。とりわけ停電の夜は蠟燭が役に立つ。何もすることがなく、必然的に家族は居間のソファーに集まり、やがて団欒が始まる。蠟燭の灯火ひとつ囲んで、たわいもない話をする。おばあちゃんが昔話をしたり、怖い話で盛り上がったたり、幼い頃の思い出を回想した



「天国にかかる十字架」

町の名前は「エルパライス」日本語訳で「天国」。その名の通り、青い天空に向かって大きな十字架がそびえている



「市場で働く少女」

小学生くらいの子供たちが親と一緒に働く姿をよく目にする。野菜を乗せた重い籠を頭に乗付けてよちよち歩く子ども、一人前に値段交渉を受ける子ども、商売文句を並べる子ども…。しかしどの子どもたちも嫌な顔見せず、むしろ初対面の私に「Hola オラ(やあ)」と笑顔で挨拶してくる。一人前の社会人として働く凛々しい顔つきに深い感銘を受ける。

り。一方、外では星の一粒一粒が驚くほど美しく見える。昔から、星がダイヤモンドや涙に例えられる所以がよく理解できる。溢れて落ちてきそうな星空の下、人と人をつなぐ温かい心が手に取るように感じられる停電の夜が、むしろ私は好きである。自然の美しさにしばし見とれる時間、何もせず何も考えなくていい時間、身近な人と過ごす当たり前のような空間…これらは、秒単位で急速に走り続ける日本社会が失いつつあるものである。

ホンジュラスという中米最貧国。見通しのきかない政治体制、貿易不利による物価上昇と食糧問題、教育体制の不確立、抱える課題は山積みである。その中で、私はホンジュラス人と、同じ明るい青い空の下、照りつける強い日差しに肌を焦がし、同じ空気を吸い、同じ物を口にし、同じ人間として、笑って泣いて怒って驚いて文句を言って感情を共有している。その中で、「何かあっても何とかなる」という上向きのスタンスは、深刻な状況において逆に絶大な効果を発揮しているのかもしれないと感じる。ホンジュラスの人々は、障壁を自力で乗り越える力、逆境を楽しみに変える才能を具えている。それは底抜けに明るい、人生を前に前に押し出す生きたラテンの太陽エネルギーである。



「長距離トラックの必須アイテム」

長距離トラックの下にハンモックを吊るしてのんびりお昼寝。